

中日新聞連載の《晴れた日には里笛吹いて》(岡進)(8月13日)にこうあった(要約)。

クヌギやコナラ林を更新する為にある範囲で皆伐したら、通りかかったハイカーに「横暴」、「自然は自然に任すのが良い」とヒステリックに言われました。そこで、放置されササに覆われて暗い、人を寄せつけない不気味な林に案内しました。

「自然を守る」とはよく言われるが、その内容は十分に理解されていない。自然のあり方、それに対する人類のかかわり(人工物)、そうした事があいまいなまま、「自然を守る」「自然との共生」というお題目が唱えられているのではないか。

自然・人類・人工物のあり方を具体的にイメージするには原生林と里山の違いを思い浮かべてみればいい。《晴れた日には里笛吹いて》(7月30日)を要約する。

日本の気候では、里山の落葉広葉樹林は放置すれば、常緑広葉樹林に移行します。鎮守の森の様な、夏は良くても冬でも薄暗い、じめじめとして四季を感じさせない林です。生活の場がこれでは憂鬱になるので、人はこうした森を切り開いて住みやすい明るい環境作りをしました。すると光の下でなければ育たないクヌギやコナラなど落葉広葉樹が育ちました。秋になれば色づき、寒い時期には葉を落して光を遮ることはありません。葉は土を肥やし、燃料の為に木を切っても、翌春には切り株から芽を出し再生します。自然植生である常緑広葉樹林は、こうして半自然ともいえる落葉広葉樹林に変わってきたのです。

私たちが日常、親しんでいる自然とは里山の自然であって、原生林の自然ではない。その里山の自然が、必要な手入れがなされない

為に原生林に戻ろうとしている。里山は村と共生して成り立ってきた場であった。

野山だけでなく海なども同じ様に、原生林的なもの=《原生林》と里山的なもの=《里山》と分けて考えることができる。《里山》は村的なもの=《村》と結び付いて成り立っているので《里山・村》と表現できる。そうすると地球という場合は、《原生林》と《里山・村》、そして人工物の高度な集合体である都市に象徴される《都市》に分けられる。

《里山・村》という「自然との共生」のイメージは、場だけでなく、人工物である文化や技術に対して使うことができる。例えば、伝統的な製法の醤油や酢などは《里山・村》であり、化学調味料は《都市》である。木製玩具は《里山・村》であり、プラスチック玩具は《都市》である。

人という存在はどうだろうか。狼少女の様に、《原生林》としても生きられるのだろうか、そうなった場合、果して「人」と言えるだろうか。本能によって生活を完結できない人は、《里山・村》的的文化を作り出し、生活を組み立ててきた。人は本来、《里山・村》であるわけだ。人類にとって、「自然を守る」とは単に自然を守るということではなく、自然と共生して育んできた伝統文化を守ることでなければならない。

最後に「からだとは・病とは」の本題に戻ろう。医療における《里山・村》とは、手当てを発展させた鍼灸・指圧などであり、食を発展させた漢方薬などである。しかし現在、場としての《里山・村》が《都市》に侵食されようとしている様に、それら医療における《里山・村》も、現代西洋医学という《都市》によって侵食されようとしているのである。

(2006年10月霜降)